
ブラザーシスター

さかの准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーシスター

【Nコード】

N4904Z

【作者名】

さかの准

【あらすじ】

半年前に起きた踏切事故。
すれ違う二人の恋人。

二人のところが通じ合った時、真実が明かされる。

生まれ育った家が、広く感じるようになった。清々すると思っていた。なにかと口出ししてくる、うるさい相手だった。心はひどく冷え込んでいた。

半年前にあった踏切事故。心の傷は未だに癒えることなく、闇の中に沈んでいる。一つ、嘘をついた。その嘘を隠すために、もう一つ嘘をついた。そうやって重ねた嘘の重みが、徐々に増していった。いつしか、嘘という鎧が偽りの自分を作り上げていた。

今日もまた、嘘を一つ積み上げる。心の奥底からぎしぎしと軋む音が聞える。終焉の予感がした。

昼過ぎの駅前。街のざわめきに包まれ、自分一人だけとりのこされたような不安に襲われる。

待ち合わせ5分前。彼女は時間通りに来たことがない。待たされることに不満はなかった。

半年ぶりの再開になるはずだ。『おれ』に気づいてくれるだろうか？

店のショーウィンドウに写る自分を見る。見慣れない自分に嫌悪感さえ感じる。お気に入りのニット帽は、ポケットの中にしまっている。

もう一度ショーウィンドウに目を向ける。自分の情けない姿が写り、なんだか馬鹿らしくなってくる。それでも、彼女が来ないように願うだけで、いまさら帰る勇気もなかった。

「あんたが作ればいいでしょ！」

隣で待ち合わせをしていたカップルが、揉め始めた。とつちが料理を作るかで、揉めているらしい。世間では、お嫁さんは料理が上手いほうがいい、と言われているが本当だろうか？ 料理の腕だけ

で結婚相手を決めるのは、軽率だと思う。男が料理すればいいだけだ。

おれの兄は、三ヶ月ほど前から料理教室に通い始めていた。肩身の狭い思いをするだろうと思っていたが、実際は中年のおばちゃんばかり。「お嫁さんが料理出来なくても安心ね」などと、おせっかいを焼いてくるらしい。先月に待望の女の子が入ってきた。童顔で、はにかむ笑顔がかわいらしい女の子だった。艶やかな黒髪は腰ほどまであり、女らしさを感じずにはいられなかった。ぎこちない手つきで料理を作る姿を見て、料理を作ってもらうのも悪くないなと思っただけ。彼女が一生懸命作ってくれた料理なら、どんな味でも喜んで食べる自分が容易に想像できたようだ。そんな兄の遅い初恋の前に立ちまはるの、やはりおばちゃんだった。

「あんたどうせ童貞なんでしょ？ 初恋は実らないわよ」

大きなお世話である。おかげで、未だに話しかけられずにいるのだった。

「あ、あの！」

「へっ？」

突然、現実引き戻され、奇声を発してしまった。

「才賀さん……かな？」

「そ、そうだけど……」

「は、初めまして！」

ポニーテールが印象的な、眼鏡少女だった。どこかで見たことがあるような……。

「あつ、間違えた……こ、こんにちは！」

知り合いだろうか？

奇妙な既視感の正体を探る様に、顔を覗き込むと、恥ずかしそうに顔を逸される。半年ぶりで相手に気づけないのは、おれのほうだった。

「もしかして……さ……え……？」

「……えっ」

「雰囲気変わったから気づかなかった」

「……あつ」

彼女とは、付き合って1年ほどだろう。今日は、彼女から呼び出された。事故で電車が止まってから、一度も会っていないかった。別に喧嘩していたわけじゃない。電車が止まっても、会おうと思えば会える距離だった。

ただ、気がつくとは半年という月日が流れていた。

部屋にかざってある二人の写真を思い出す。おれの記憶が正しければ、半年前は鮮やかな金髪だった。

「なんで染めたの？」

「えっ……あつ……気分転換？」

彼女は自分の髪をまじまじと見つめている。気分転換失敗ということだろうか。思い描いていた彼女のイメージとは違い、ずいぶんと落ち着いて見える

この半年の間に、彼女にどんな変化があったのだろう。女性が髪を切るのは彼氏と別れたからだと聞いたことがある。なんだかそれに近いものを感じた。「と、とりあえず喫茶店でも入ろうか」

側にある喫茶店を指さす。

「は、はい！ ぜひ！」

一秒でも早く、無性に乾いたノドを潤したかった。

昼過ぎの店内は人がまばらで、店員も暇そうにしていた。店員に二人と告げると、おれのうしろをのぞき込んでくる。

「あれ？」

振り向くと、彼女の姿がなかった。

喫茶店を出ると、彼女すぐに見つかった。隣にある楽器屋のショウウィンドウを、熱心に覗いているようだ。

「どうかした？」

「……また、聞きたいです」

「えっ？ あ、ああ……そうだね」

彼女の不意打ちを受け、適当に相づちを打ってしまった。彼女はじっと見つめたまま動こうとしない。

「おい」

「……」

「もしもし」

「……」

問いかけに全く応じる様子はない。心奪われ、他の世界に旅立ってしまったらしい。後ろから覗いてみる。

左側には鍵盤、右側には多数のボタンが配置されており、中央は蛇腹になっている。アコーディオンだった。最近のアコーディオンが流行っているのだろうか？

おれの兄もアコーディオン弾いてた時期がある。きっかけは、彼女のいない兄に向けた何気ない一言だった。

「音楽をやればモテルんじゃない？」

家にあつた唯一の楽器が、アコーディオンだった。普通はギター弾きたがるのだが、粋がつているようで嫌だったらしい。飽きずに練習を重ね、公園で路上ライブのようなこともしていた。足を止める人は物珍しいだけで、歌を聴いている人なんていない。自主制作したCDは一枚も売れなかった。

結局、目的の彼女を作ることは出来ずにやめてしまった。

そういえば、料理教室の女の子もよく歌を口ずさんでいたらしい。その曲は、世界でも知ってる人が一人しかいないぐらい、マイナーな曲だった。おれの一番好きな曲だったこともあつて、運命的なものを感じてしまう。運命的なんて言葉が出るぐらい、おれの恋愛経験が足りないのは明白だった。

音楽をやるだけではモテないのは確かだった。それでも、女性に音楽が好きなことは、間違っていないのかもしれない。

運ばれてきたホットコーヒーを一口飲み、やっと落ち着く。どう

やら彼女のほうが緊張しているようで、さつきからしきりにこちらを見ては、慌てて目をそらしていた。

じっとしてられないが、話すこともできない。そんなジレンマに陥っているようだ。

眩しいぐらい明るい店内とは対照的に、重く薄暗い雰囲気が二人を包む。

「……お、お兄さんは元気ですか？」

突然、彼女が口を開いた。

「……才賀さん、お兄さんいますよね？」

おれは二人兄弟で、たしか彼女にも姉がいたはずだ。

「元気だけど……」

「……音楽、続けてますか？」

「その……半年前に止めたけど……」

「そ、そうでしたか……すみません」

そう言って、また黙り込んでしまった。謝る意味はわからないが、俯く姿は落ち込んでいるようにも見えた。このまま黙っていてもしかたない。とりあえず、疑問に思ったことを聞くことにした。

「さんづけなのはなんで？」

「……えっ」

「会ったとき才賀さんって」

おれはいつも呼び捨てにされていたはずだ。名前でなく名字で。才賀という名字がかっこいいらしい。

「その……あっ、久しぶりなので！」

「そうなんだ」

「そうです！」

「……」

「……」

「なんで敬語なの？」

「……だいぶ……久しぶりなので！」

「そうなんだ」

「……そうなんです！」

「……………」

「……………」

会話が終了した。深海のような沈黙が広がる。世の中の恋人同士は、どうやって会話を続けているのか教えて欲しい。

二人の空気を察するようにアコーディオンの音色が店内に鳴り響いた。彼女の携帯のようだ。携帯を片手にうるたえ、あたふたとしている。

「えっ、あつ！ わ、わたし!？」

彼女は、携帯とおれを交互に見比べるた後、割れ物を扱うように携帯を鞆の中にしまった。

「出なくていいの？」

「……全然いいです」

「出ていいよ」

「何というか……むしろ出たら負けかなって」

なぜ遠慮気味なのだろう？ おれの知っている彼女なら、遠慮せずに電話に出るはずだ。薄々感じていた違和感が、徐々に大きくなっていく。

髪の色が変わっていたこと……。

言葉遣いが敬語になっていること……。

挙動不審な彼女の態度……。

隠した宝物が見つからないように、冷静をよそおっているような……。ふと、兄の言葉を思い出す。

「携帯電話メールが来ても、その場でみなかったら浮気だよ」

料理教室のおばちゃんから教わったらしい。料理ではなく、恋愛指南をうけに行ってるようだった。その内容を思い出しながら、順番に当てはめていく

会話への反応・リアクションがうすい。

髪型や服装の好みが変わる。

音楽の趣味や、好きな芸能人が変わる。

彼女は見事に当てはまっていた。偶然の一致かもしれない。信じてい気持ち小さく萎んでいく。彼女の反応は、すでに恋人同士のものではないように思えた。

終わってしまった恋。

別れ、そして失恋。

そんな言葉が頭をよぎる。彼女はもしかすると……。

「……あ、あの！」

体中から絞り出すような声で切り出された。表情は冷静に装っていたが、彼女の手は震えていた。

「……いるんです」

「……えっ」

耳を疑った。想像していたとはいえ、実際に言われるとは思ってなかった。もつと早く気づくべきだったのかもしれない。半年という時間は、人が変わるのに十分な時間だということに。

「会ってほしい人がいるんです」

駅を移動するとき、彼女は電車を一本見送った。乗らないのか訊くと彼女は「……乗ります」と答える。

その言葉に反抗するように、彼女の足は一步も動かなかった。罪悪感にさいなまれているのだろうか？　あるいは、同情しているのかもしれない。

不思議なさみしさを感じる一方で、ほっとしている自分がいることに気づく。弱い心に自己嫌悪が込み上げてくる。おれは現実を黙って受け入れる事しか出来ない。それが、お互いにとって一番いい選択肢に思えた。

空が赤く染まった海沿いの公園。心地良い潮風を感じながら海を眺める。

『初恋は実らない』

それは本当だろうか？　本当なら、一度は失恋なければならぬ。

好きな人から嫌われる。

想像するだけで、体が切り裂かれるようだった。傷を回避するには、恋をしなければいいのだろうか？ はじめて恋をする人は、避けて通れない道なのだろうか？

「……なぜ、気持ちいいですね」

髪をなびかせながらつぶやく彼女の表情から、迷いの色が消えていた。おどおどした印象はなくなり、どこか吹っ切れたようすがすがしささえ感じられる。

友達以上恋人未満。

そんな線引きをされた気がした。おれの脳内に構築されていた彼女の姿は、どこにもなかった。

後ろでは、青年がギターをかき鳴らしていた。おれの気持ちを代弁するかのように、がむしゃらに歌っている。立ち止まっている人はいない。その不格好ながら真っ直ぐな姿は、忘れてはいけなにかを訴えているように見えた。そのせいか、とても居心地が悪かった。

「わかりますか？ 彼が歌う理由……」

おれの考えを読んでいるかのように、彼女が訊いてくる。真っ先に浮かんだのは『女の子にモテるため』だったが、瞬時に考えを消す。

「歌を聴いてほしいから……」

「……違いますよ」

子供に教えるような優しい口調だった。

「……知ってほしいんだと思います」

「……自分はここにいてるってことを」

「……だから一人でもいいんです」

「……たった一人でも気づいてもらえたなら、彼は救われるんですよ」

誰に向けるわけでもなく、ささやく彼女の表情は、どこか寂しげだった。それは同情や慈悲といったものではなく、純粹に心からわ

き出た感情のように思えた。

「……行きましようか」

そう言って、彼女はその後にした。

派手なネオンサインで装飾された、無数の看板。建物の入り口は照明が落とされ、異様な雰囲気を漂わせている。通りゆく人々は力ツプルばかり。一目をはばからず、いちやいちやと特有のムードを漂わせている。この場所に立っていることが不思議でしかたない。

ラブホテル街。空想上の建物だと思っぐらい、縁の無かった場所。こんな形で来ることになるなんて思わなかった。これが、彼女にとつての贖罪なのだろうか。彼女は迷いを振り払うように先頭を歩く。質問は一切受けつけない。そんな意思を強く感じた。

線路沿いの道をひたすら歩く。彼女は罪滅ぼしのつもりなのかもしれない。せめてもの償いとして自分の身を捧げる。彼女の覚悟の大きさを感じるには十分だった。

彼女の行為を受け入れることはできない。彼女が別れたいというなら素直に受け入れる。別れる代償に体を売るようなことをさせたくはなかった。

彼女の決心は固いように思える。彼女自身がそうしなければ、納得できないのかもしれない。彼女を傷つけずに断るには、どうすればいいのだろうか。ここまで覚悟を決めた人間を、説得する自信がなかった。

突然、彼女が立ち止まる。

「ここです」

そこはホテルの入り口ではなかった。だれか待っているわけでもない。立っているのはおれと彼女の二人だけ。道ばたには、いくつもの花束が供えられていた。

そこは半年前の事故現場だった。

静かに手をあわせる。花束の他にもぬいぐるみやたばこ、CDまで供えてある。彼女が供えてあったCDを手取る。いかにも手作りといった、安っぽいジャケットのものだった。

「彼女は、この曲が好きだったんです」

「彼女は、昔から人見知りの激しい子でした……」

「友達の輪にも上手く入れなかったみたいです……」

「わたしは、何もしてあげられませんでした……」

「気づいてあげることも出来なかった……」

「彼女が思い詰めていたことに……」

「自殺しようと考えていたそうです……」

「人生最後の散歩に選んだのが、あの公園でした……」

「その時、この人の歌を聴いたんです……」

「この人は、アコーディオン弾きながら歌っていました……」

「お世辞にも上手くはありませんでした……」

「誰か聴かせようとしているわけではないようでした……」

「ただ、自分の想いを真っ直ぐにはき出しているだけで……」

「彼の歌に立ち止まる人は、一人もいませんでした……」

「だけど、彼の後ろで一人だけ聴いてる人がいました……」

「彼女です……」

「だれも聴いていないその歌は、彼女に届きました……」

「自分の代わりに叫んでくれる……」

「自分と同じ想いを持った人が他にもいる……」

「それが彼女の心に響いたんです……」

「彼女は命を救くわれたんです……」

「それから、何度も彼女はこの人の歌を聴きに行っていました……」

「彼の見えないところで聴いていたそうです……」

「彼女は、この人のおかげで、あなたと出会うことが出来たんです……」

彼女は、CDを花束に立てかけた。

「このCDは、記念すべき最初の一枚なんだそうです」

「この人はすごく驚いていました」

「誰も聴いていない曲を欲しがる人なんて、いるとは思ってなかったんでしょね」

「記念にと無償で譲ってくれたそうです」

「その時も、彼女はずっと俯いていました」

「恥ずかしくて、顔が見れなかったなんていうんですよ」

「ほんとは、お礼を言わないといけないぐらいなのに……」

思考が追いつかない。寒気が身を震わせ、鳥肌が立つのがわかった。

「君はいたい……」

「……も、申し訳ないです！」

突然、頭をさげ謝る彼女。彼女は掛けていた眼鏡をCDの横に置き、結っていた髪を下ろした。

「なっ……」

「お姉ちゃんの紗直なんです！」

「……」

声にならない。

紗直……。

知っている名前だった。

「このままじゃいけないってわかってたんです……」

「早く伝えなくちゃって……」

「でも、どうしても言い出せなくて……」

「もう誰も悲しませたくなくて……」

「だけど、ほっとくわけにもいかなくて……」

「それに、妹から何かあったらよろしくって言われてたし……」

「あとっ、あとっ……」

素になった彼女を見て、ついつい笑ってしまった。

「ふえ？」

不思議そうにきょとんとしている。

「別に怒ってないから」

「そ、そうなんですか??」

感じていた違和感の正体。無理やりはめたピースがばらばらになり、元の形に組み上がる。今日初めて会ったはずの彼女に感じた、奇妙な既視感。料理教室の女の子が口ずさむ、世界で一人しか知らないはずの歌。わかってしまえば、実に簡単なパズルだった。

「あ、あの！ この曲、すごくいい曲なんです！」

「私も大好きなんです！」

「あつ、でも……公園には来なくなっちゃって……」

「もう音楽止めちゃったのかも……」

「また聴きたいんですけど……」

誰も聴いていない曲に耳を傾ける少女。そのことを知らずに歌い続けていた。誰にも届いていないと思っていた歌は、届いていたんだ。それだけで救われた気がした。

ひとつの言葉が、歌うきっかけをくれた。

ひとつの歌が、一人の少女を救った。

ひとつの遺書が、彼女との出会いをくれた。

今、この歌を必要としている人が目の前にいる。歌おう。ニット帽をポケットから取り出す。

たった一人のために……。いや、三人か……。最愛の人と共に旅立った、二人のためにも……。

今朝供えた花の前で、『俺』はまた歌い始める。

『おれ』がまとった鎧は、もう必要ない。

『俺』の足で立ち、『俺』の曲を、偽りのない『俺』が歌う。初恋の相手に、想いが届くことを祈りながら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904z/>

ブラザーシスター

2011年12月16日19時51分発行